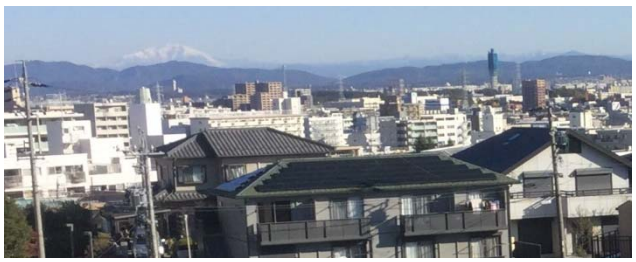
自宅から北東を眺める

写真は先日、自宅 6 階の階段から撮ったものだ。ベランダからは西の空を眺めるが、階段からは北から東へと広がる遠くの景色が美しい。朝 6 時前ベランダに出ると、赤く染まりつつある朝焼けの空に、黒い雲が細長く広が伸びていた。急いで階段に行って、北から東につづく黒い雲を撮った。なかなか幻想的だ。

次の写真 2 枚は昨朝の 9 時過ぎ、外出のため玄関から廊下に出ると、北から北東に伸びる山々が、じつによく見えた。遠くの山は白く輝いていた。青空のもとで、なんとも美しかった。立ち止まって、カバンから愛用の iPad を取り出した。

長年にわたり見慣れている景色ではあるが、いろいろと「思い出」もある。わが教員生活を回顧するためにも、すこし語ってみよう。



この写真からは見にくいが、自宅から北東の方に見えるのが、瀬戸の「海上の森」。ここには、愛知万博が開催される前に何度も訪れた。当初、愛知万博は「海上の森」で開催される予定だった。貴重な「里山」を破壊するなという住民団体の運動が繰り広げられた。住民団体の催しにもハイキングを兼ねて、よく参加したものだ。

万博「誘致騒動」は、名古屋市立大の人文社会学部が発足した頃だった。学部 1 回生と 2 回生らと、「海上の森」に行ったことがある。確か、「ものみ山」にも登ったと思う。私も若かった。それが「現写」という現代社会学科の学生が発行した「手づくり新聞」に掲載されたと思う。学部が新設され、学科の主任を務めていたこともあり、とにかく精力的に動き回った。あれから 20 年余りの歳月が流れた。

愛知万博は地元のみならず、国内外の運動により紆余曲折を経て、「メイン会場」が長久手の青少年公園に変更されることになる。ここにも、ゼミ生と行った記憶がある。万博が開催されたとき、階段から夜も光り輝く会場を眺めることができた。「環境万博」と言いながら、環境に大きな負荷を与えていることをレポートした。「幻の名古屋五輪」とともに、愛知万博についても「辛口コメント」を書いてきた。

日ごろ見慣れた景色からも、思い出を綴ることができた。

(2017 年 11 月 23 日)